角川文庫
—876—

母の初戀・高原

他二篇

川端康成

角川書店

昭和二十九年八月三十日　初版發行
昭和三十年六月十五日　五版發行

臨時定價　七拾圓

著作者　川端康成
發行者　角川源義
印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田町一ノ二三

角川文庫

母の初戀・高原

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八　株式會社角川書店
電話九段(33)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan　曉印刷・本間製本

母の初戀・高原

他二篇

川端康成

角川文庫

876

目次

高原　五
童謡　九九
母の初戀　一三九
夕映少女　一七五
解説　古谷綱武　一九九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

高原

一

陸軍の參謀中佐が、
「佛法僧が鳴いてゐます。」
と、獨言のやうに呟いて、顔を上げた。
それで車内はしんと靜まつた。
碓氷のトンネルに入るといふので、車掌がガラス窓をしめて行つた後だつたけれども、なかまで響いて來た。
ブツポオン、ブツポオウン……
と、なにか深い虚空を叩く音のやうに、高い空を渡つて來た。
信越線の熊の平に、汽車は止まつてゐた。
「ほう、佛法僧、なるほど、あれが佛法僧ですか。」
と、社長が振り向くと、早速社長の用心棒は、その窓をあけた。社長は首を突き出した。
用心棒自身も、隣りの窓から胸を乗り出した。
ブツポオン、ブツポオウン、と二聲の佛法僧だつた。「ソウ」は鳴かない。

社長は立ち上つて、扉の外に出た。

社長の向ひ側に坐つてゐた須田も、客車の乘降口へ出て行つて、社長と肩を押し合ふやうに、聲の方を見上げた。

薄月夜だつた。

線路の直ぐ前に、切り立てたやうな山が、黑々と聳えてゐた。その肌は岩かもしれなかつた。

「今日は鳴いてゐますか。」

と、うしろの機關車から、機關手も黑い姿を現して、

「汽車が通る時は、鳴き止むのが普通なんですが、今夜はよく鳴いてゐる。」

後部に連結してゐる小山行の車輛は、高崎驛で切り離されて、輕井澤止まりの二等車が一番うしろになつてゐたことも、そこに機關車がつけ加へられてゐることも、須田はそれまで氣がつかなかつた。直江津行の汽車である。

須田はプラツト・フオウムへ降りて、歩いてみた。踏みつける小石は薄暗かつた。

列車の横に立ち止まつて、佛法僧を聞いてゐる驛員もあつた。

上野驛を出る時は、應召兵士の見送りもあつたのだが、ここのプラツト・フオウムから見ると、驛の電燈も列車の窓の明りも弱く赤茶けて、山家の煤けた障子のともし火に似てゐた。

佛法僧はなにか迫るやうに鳴きしきつてゐた。

汽車が動き出すと、社長は中佐に、

「ありがたう。教へていただいたお蔭で、初めて佛法僧を聞きました。いいものですな。」と、禮を言つた。

「この汽車で來ると、ちやうどよく鳴いてゐる時間に、ここを通ることになるやうです。」

と、陸軍中佐は淡白に微笑しただけで、また元のやうに軍事關係のものらしい小册子を端然と讀み續けた。

今の中佐の言葉で、中佐がこの線路を通ひ慣れてゐるといふことは、先づ明らかになつた。この參謀中佐は、軍務を帶びてゐるのだらうか、避暑に行くのだらうかと、さつきから須田はそんなことが氣にかかつてゐた。

須田は隣りの西洋人に日華事變の話をしかけられるにつけても、この中佐が聞いてゐるといふことを、なんとなく意識に入れてゐたからである。

一輛が二等と三等とに區切られてゐて、二等の方は兩側の窓沿ひに長椅子のやうな座席がある、舊式の客車だつた。二等の客は外人三名に、日本人は社長とその用心棒、陸軍中佐、それから須田の四人きりだつた。

須田は社長と向ひ合ひに腰かけてゐた。

社長といつても、何會社の社長なのか、須田には分らない。見送りに來てゐた社員達が、社長と呼ぶのを聞いただけである。社長だと思つて見ると、旅行鞄やステッキまで、それらしく上等なものだつたが、人品は高い方でなかつた。大阪風に氣さくで賑かな人だつた。上野驛では一人

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

でしやべつてゐた。會社員が四五人づれの騒々しい週末旅行かと、初め須田は見てゐたが、そのうちに老人一人が上機嫌に調子づくにつれて、ほかの者は皆聞き役に廻つたので、社長の避暑を見送りに來てゐるのだと分つた。話の模樣では、相當の會社のやうだつた。社長は會社から眞直ぐ上野驛へ來たらしかつたが、大勢の社員のうちで、特に驛まで見送りに來てるのは、どういふ人達だらうかと、須田は思つてみた。

「社長のお留守中に應召して、二度と生きてはお目にかかれないかもしれません。」

と、陽氣に言ふ人もあつた。

不意に社長は、かういふ人達にありがちの口癖だが、自分はまだ若くて、ほんたうの仕事はこれからだから、なにより長壽を保つて、大いにやらねばならんと、まくし立てた。社長は六十過ぎだらう。

その勢ひになにか壓迫されて、中年の社員達は陰のある愛想笑ひを浮べながら、言葉少なになつた。

「君、この間、百十で富士登山をした爺さんがあつたぢやないか。ええ？　名古屋の人だつたかね。」

「はあ。」

「あれだよ、君。僕もあすこまでゆくつもりだ。あの勢ひでやらんけりやいかん。あれを思ふと、僕なんかまだ小僧つ子で、前途洋々たるもんだね。うん、さうだ、その爺さんが、不老長壽

の養生法の祕訣を話したのが、新聞に出とつたけれども、なるほどこれは道理にかなつてると思つて感服した。十ヶ條あつたがね、先づ第一に言つたことが、背骨をね、いつもかうしやんと眞直ぐにしとくんださうだ。この背骨を直立さしとくといふことが、すべて體の器官を正しく保つもとぢやね。」

社長はいかにもわが意を得たといふ風だつた。痩せてゐるけれども姿勢のいい社長は、この時改めて腰から眞直ぐに立てた。

社長の前に竝んでゐた社員達も、びつくりしたやうに、思はず胸を張つた。

その十ヶ條を、社長がしやべりきれぬうちに、發車してしまつた。

社長の横に用心棒がひとり殘つた。

社長はぴたりと口を噤んで、脇見もしなかつた。急に人柄が變つたやうに、近づきにくい位が具はつて見えた。

少し出張つた薄い齒莖に小綺麗な入齒の、せはしく動くのが、この老人の氣品をそこねてゐるらしかつた。

眞直ぐにうしろへ寄りかかつて、社長は幾種類もの夕刊に目を通した。すべては日華事變の記事である。

筋骨逞しい用心棒は、股を大きく開き、その間に掌を組み合せて、ハンケチを握つてゐた。社長も用心棒も同じ姿勢を長いこと崩さなかつた。用心棒には、この立派な恰好が一番樂であるら

しかつた。みごとな腹が自然と脚を開かせ、胸を突き上げてゐるやうに、盛りあがつた頰の肉は顏全體を押し上げてゐて、どこか人間らしい閃めきが缺けてゐると見えた。しかし、よく見ると、どこからどこまで人間らしさに安んじてゐる體格だと、須田には思はれて來た。

いかにも健康で聰明さうな參謀中佐と須田との間には、老外人が坐つてゐたが、須田はいつとなくこの老人からぽつぽつ話しかけられた。

日本にしばらくゐると、美しい金髮も色が惡くなるさうである。須田は輕井澤で大分外人を見なれたところでは、西洋人は案外みつともない人種だと思つてゐる。この老人のうらぶれた憂愁も、日本の風土の垢にしみたせゐか、老人自身の歷史のせゐか、須田には分らないけれども、老いぼれた動物臭さは、また日本の老人とはちがふ、妙ななつかしさも感じられた。

老人の國籍は須田には見定められない。

無論日本語は達者だつた。ジヤパン・アドヴアタイザアを讀んでゐたが、それに出て來る華北の戰地の地名を、漢字ではどんな形の字か、または日本風の發音はどうかと、須田にいきなり話しかけた。

唐突な質問に須田は面食つた。自分の見てゐる夕刊とその英字新聞とを突き合せてみたけれども、英字新聞の方は朝刊で記事がおくれてゐるために、尙更須田は返事をするのに骨が折れた。

須田から少し離れて左へ坐つてゐる參謀中佐に聞けば、直ぐ分ることだと思つたが、中佐が餘り眞面目に小册子を讀みながら、赤鉛筆で書き入れなどしてゐるので、邪魔することは出來なか

つた。

須田がやつと捜し出した漢字を、

「さうですか。」

と、老人はなんの感じもなささうに眺めてゐた。

そして網棚の上の荷物を見上げながら、老人は言つた。銀座の百貨店で買物をして來たのだが、街頭に千人針のやさしい婦人が立つてゐるほかは、銀座通も百貨店も殆ど變りなく賑はつてゐた。日本で興奮してゐるのは新聞ばかりか。

「そんなことがあるもんですか。」

と、須田は老人の意外ないひぐさを、頭から否定した。

「ヨオロッパ人は、世界大戦を知つてゐます。戦爭といふものに、日本人のやうに安心してゐられない。」

「安心？」

と、須田はまた聞き咎めた。

しかし、須田はどういふ心理からか、今中國に起つてゐる戦爭について、外人と話したくはなかつた。

「國民は政府と軍部を絶對に信頼してるんですよ。それ以外に安心してゐられるわけはないでせう。いくら勝つにきまつてる戦爭だつて……。」

老人は默つてゐる。
「この間の議會を見れば分ります。議員は國民の代表ですからね。」
須田は突慳貪に言つて、今の世ではをかしな答へかしらと思つた。
「戰爭しながら國民が、こんなに落著いてゐる、そんなことはどこにもあるはずありません。」
と、老人は言つた。
「だつて、安心してると、あなたが勝手にきめてらつしやるだけぢやありませんか。」
「さうです。さうです。」
と、老人はたわいなくうなづいて、
「戰爭の後の敵國のことまで、皆さん心配してゐますね。餘程日本はえらくなりました。」
なるほどさうかと須田は考へた。
しかし、外國人の日本語といふものは、さも素直な眞實らしく聞えるくせに、反芻してみると、裏が空白のやうな響きで、そのために反つて曖昧だつた。
老人の顏を見ながら須田は言つた。
「今は日本としては、戰爭のために後で中國が赤化するとしたら、それが一番厄介でせうね。」
老人はもつともらしくうなづいただけだつた。
陸軍中佐も社長も、須田と外人との會話には、無關心な風を裝つたゐた。
須田は今の戰爭について毎日の新聞記事以上に知つてゐるわけではないので、むしろこちらか

ら、西洋の諸國が日華事變をどう見てゐるか、老人から聞きたい程だつたが、それは言ひ出しにくかつた。また日本じみた老人は知らないかもしれぬ。

しばらくして老人は微笑しながら穏かに言つた。

「日本は戰爭を恐れないのに、外國人を警戒し過ぎますね。」

須田は咄嗟に意味がのみこめなかつたが、

「あなたをですか。」

「いいえ、ちがひます。私は日本の友達だといふこと、警察によく分つてゐます。もう日本に長い。」

と、老人は斷乎と首を振つて、

「けれども、迷惑してゐる人澤山あります。これ日本の損です。」

「それはいけませんね。しかし、日本が一番ひどいですか。世界がだんだんさうなつてゆきますし、今は平和の時とちがひますから、外國人が惡氣はなくつても、日本で見たり聞いたりしたことを、お國へ手紙に書いてやると、それが思ひがけなく日本の不利益になる。さういふことも多いでせう。」

「さう。」

老人は笑つて、

「けれども、世界の平和のためには、自分の國に來てゐる外國人を親切にするのは、大事な方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com